武蔵野日曜聖書講筵　聖霊降臨節祈祷会

聖霊降臨

――使徒行伝第２章、３章――

１９９５年５月28日
小池辰雄

キリスト道　宗教心を土台に　無者キリスト　行為に裏付けられた言葉　キリストに圧倒されて生きる　終りなき生涯　霊体に復活　キリストの十字架・復活　霊的な力

【使徒２】

1五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、2烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。4彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。

5時に敬虔なるユダヤ人ら天下の国々より来りてエルサレムに住み居りしが、6この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合い、7かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、8如何にして、我等おのおのの生まれし国の言をきくか、9我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、10フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人――ユダヤ人および改宗者――11クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語にて彼らが神の大いなる御業をかたるを聞かんとは』12みな驚き、惑いて互いに言う『これ何事ぞ』13或者どもは嘲りて言う『かれらは甘き葡萄酒にて満たされたり』

14ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣べて言う『ユダヤの人々および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ、15今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、16これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。17「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影を見、なんじらの老人は夢を見るべし。18その世に至りて、わが僕・婢女に、わが霊を注がん、彼らは預言すべし。19われ上は天に不思議を、下は地に徴を現さん、即ち血と火と煙の気とあるべし。20主の大いなる顕著しき日のきたる前に、日は闇に月は血に変らん。21すべて主の御名を呼び頼む

者は救われん』22イスラエルの人々よ、これらの言を聴け。ナザレのイエスは、汝らの知るごとく、神かれによりて汝らの中に行い給いし能力ある業と不思議と徴とをもて汝らに証し給える人なり。23この人は神の定め給いし御旨と、預じめ知り給う所とによりて付されしが、汝ら不法の人の手をもて釘磔にして殺せり。24然れど神は死の苦難を解きて之を甦えらせ給えり。彼は死に繋がれおるべき者ならざりしなり。25ダビデ彼につきて言う「われ常に我が前に主を見たり、我が動かされぬ為に我が右に在せばなり。26この故に我が心は楽しみ、我が舌は喜べり、且わが肉体もまた望みの中に宿らん。27汝わが霊魂を黄泉に棄て置かず、汝の聖者の朽ち果つることを許し給わざればなり。28汝は生命の道を我に示し給えり、御顔の前にて我に歓喜を満たし給わん」29兄弟たちよ、先祖ダビデに就きて、我ははばからず汝らに言うを得べし、彼は死にて葬られ、其の墓は今日に至るまで我らの中にあり。30即ち彼は預言者にして、己の身より出づる者をおのれの座位に坐せしむることを、誓いをもて神の約し給いしを知り、31先見して、キリストの復活に就きて語り、その黄泉に棄て置かれず、その肉体の朽ち果てぬことを言えるなり。32神はこのイエスを甦えらせ給えり、我らは皆その証人なり。33イエスは神の右に挙げられ、約束の聖霊を父より受けて汝らの見聞きする此のものを注ぎ給いしなり。34それダビデは天に昇りしことなし、然れど自ら言う『主わが主に言い給う、35我なんじの敵を汝の足台となすまでは我が右に坐せよ」と。36然ればイスラエルの全家は知るべきなり。汝らが十字架に釘けし此のイエスを、神は立てて主となし、キリストとなし給えり』

37人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちに言う『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』38ペテロ答う『なんじら悔い改めて、おのおの罪の赦しを得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん。39この約束は汝らと汝らの子らと凡ての遠き者、即ち主なる我らの神の召し給う者とに属くなり』40この他なお多くの言をもて証し、かつ勧めて『この曲れる代より救い出されよ』と言えり。41斯てペテロの言を聴き納れし者はバプテスマを受く。この日、弟子に加わりたる者、おおよそ三千人なり。42彼らは使徒たちの教えを受け、交際をなし、パンを擘き祈祷をなすことを只管つとむ。

43ここに人みな敬畏を生じ、多くの不思議と徴とは使徒たちに由りて行われたり。44信じたる者はみな偕に居りて諸般の物を共にし、45資産と所有とを売り各人の用に従いて分け与え、46日々、心を一つにして弛みなく宮に居り、家にてパンをさき、歓喜と真心とをもて食事をなし、47神を讃美して一般の

民に悦ばる。斯て主は救わるる者を日々かれらの中に加え給えり。

【使徒3】

1昼の三時、いのりの時にペテロとヨハネと宮に上りしが、2ここに生まれながらの跛者かかれて来る。宮に入る人より施済を乞うために日々宮の美麗という門に置かるるなり。3ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施済を乞いたれば、4ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。5かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、6ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』。7すなわち右の手を執りて起こししに、足の甲と踝骨とたちどころに強くなりて、8躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讃美しつつ彼らと共に宮に入れり。9民みなその歩み、また神を讃美するを見て、10彼が前に乞食にて宮の美麗門に坐しいたるを知れば、この起こりし事に就きて驚駭と奇異とに充ちたり。

●キリスト道

キリストが十字架にかかられ復活されて、それからちょうど五十日目が「ペンテコステ」という。「ペンテコステ」というギリシャ語は「五十日目」という言葉です。使徒行伝2章は非常に著しいところです。使徒行伝第2章。

1五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、2烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。4彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。

まぁ、えらいことです。ところで、この頃の日本の世相をみていると、非常に心外にたえない。あの「オウム」（オウム真理教）なんてのが世を騒がせたり。正直、日本そのものには望みはない。

望みは上からくる。その天来の望みを受けとるのは、本当に聖霊の器でなければダメなんです。皆さんは、今日はその聖霊降臨の日ですが、どうぞその自覚を新しくしていただきたいと思います。

キリスト教とかクリスチャンとか言っても、当てにならない。大体、私は

「キリスト教」

という言い方が嫌いだ。

「キリスト道」

道なんです。教ではない。自分の足で歩かなければどうにもならない。それを「道路」という。「路」という字は足編に各々と書く。我々一人一人が「道」に即して歩くところが「路」

なんです。天下の大道に即して歩くが、歩く所は一人一人みな違う。その意味において、キリストの者はキリストに即して、その時その時に示されるところを歩いていく。人真似はいらない。そういう自覚でもって進んでいただきたいと思います。

●宗教心を土台に

今、日本の国は精神的に一番あぶない。大体、教育者に、西郷南洲が

「敬天愛人」

と言った、この「敬天」がない。魂の縦の関係が切れている。そんなことで教育ができるかという。教育者は、西郷南洲の敬天愛人のあの精神を持たなければ、教育はできない。嘆かわしい状態です。

「偏差値がどうの、成績がどうの」

と、そんなことではない。

西郷さんの銅像が上野の一角に建っています。私はあの前で幾たびか冥想したことがあります、西郷さんみたいな人が今はいないというわけでね。

こないだ、D大学の創立30周年の集まりで私は一席やらせられたから、

「敬天の念がなければダメだ」

ということをはっきり言いました。最初の学長である天野貞祐先生は内村鑑三先生を非常に尊敬していました。縦の宗教哲学的なものが土台になっている学長です。天野先生に私は、

「小池君、東大を退職したらこちらの大学へ来てくれ」

とはっきり言われた。それは私が内村先生の弟子であるからです。

そういう意味で、日本は本当の宗教心を――仏道でもいいですよ。仏道、キリスト道、どちらでもいいが――とにかく、宗教心を土台にしなかったら、日本は精神的に一番情けない国です。特に、キリスト者はそのことを自覚しなければならない。皆さんも大いに戦ってください。

エレミヤ記2章に、

「11**その神を神にあらざる者に易(かえ)たる国ありや。然るに我民(わがみん)はその栄を益なき物にかえたり。**

偶像にしてしまった。

12**天よこの事を驚けいたく怖れよとエホバいいたもう。**

「天よ」と言って、天にまず向かっている。

13**そはわが民はふたつの悪事をなせり。即ち活ける水の源なる我をすて自己(みずから)**

水溜(みずため)を掘れり。すなわち壊(やぶ)れたる水溜にして水を有(も)たざる者なり。」（エレミヤ

2・11～13）

「そんなことをやっていて、何がエホバの民だ。何が選民だ。水ためを掘って、何

やっているか」

と、預言者エレミヤが神の言葉を受けて怒っているわけです。

「活ける水の源」

はキリストであり、神である。我々の主キリストは「活ける水の源」である。

「わが水を飲む者は渇くことなし」

と仰った。

教育の根底に、仏道でもキリスト道でも、とにかく宗教的なものがなかったらダメなんです。ゲーテも、

「文学でもその基に宗教的なものがなかったら、本当の文学は成り立たない」

と言っている。ヴィクトル・ユゴーでもそうです。ブラウニングでもそうです。日本の漱石さんはそんなことを言ったかというんだ。

とにかく、今の日本は本当に霊的なものが非常に枯渇してしまっている。だから、我々はそのことを本当に自覚しないといかん。

●無者キリスト

エレミヤに神さまはちゃんと言っている。

「18 **視よ、われ今日この全国とユダの王とその牧伯（つかさ）とその祭司とその地の民の前に汝を堅（かた）き城、鉄（くろがね）の柱、銅（あかがね）の牆（かき）となせり。19 彼等なんじと戦わんとするも汝に勝たざるべし。そはわれ汝とともにありて汝をすくうべければなりとエホバいいたまえり。**」（エレミヤ１・18～19）

「お前一人で大丈夫だ、私が一緒だから」

という。

「一騎当千」

という言葉がある。我々一人一人は、あなた方一人一人は、キリストを持つものは一騎当千なんだ。福音は戦いです。この世との戦い、悪との戦い。男の人でも女の人でも、霊的な戦いです。それは相手を倒すためではない。相手を救うためです。相手を救うための戦いなんです。

「われ汝とともにありて汝をすくうべければなり」

とある。

「汝を救うばかりでなくて、汝を通してまた人を救うためである」

と、もうひとつそこに付け加えないではいられない。

旧約の言葉は、新約の聖霊の光で読んでいかなければダメです。そうすると、今私が言ったような消息がそこから出てくる。

パウロがローマ書８章ではっきり言っている。

「9 **然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。**」（ロマ８・９）

「聖霊のないものはキリスト者ではない」

と。キリスト者というのは聖霊が無かったならダメなんだ。

私は無教会にいた時には、

「十字架、十字架」

と散々、十字架のことを聞かされて、聖霊のことは聞かなかった。無教会信仰は十字架信仰です。キリストは十字架に架かって贖罪をなさってから、復活されて、そして聖霊をあとで送ってくださった。

「汝ら、祈って待っていろ。大事なものを送るから」

と。大事なものとは聖霊のことです。キリストの霊です。キリストを通った神の霊です。本願の霊の力です。

私は無教会にいた時に、しょっちゅう

「信仰、信仰」

と聞かされた。

「信仰が大事だ」

と。そして、「自分の信仰」を一生懸命で考えている。

「まだ私の信仰は…」

なんて。私は、

「信仰なんかありません。こっち側は無です、何もありません。キリストの本願がくるだけです。この本願に圧倒されて生きているだけです」

とはっきり言うんだ。私は圧倒されていきている。キリストの本願の力、光、愛、生命、これに圧倒されて生きている。ありがたくてしょうがない。そして力が来てしょうがない。本当にそうですよ。自分の信仰なんかひとつも考えない。私は「無者」だから。その

「無者」

の最たるものはキリスト自身なんです。

「われ何事も為しあたわず。何も言えない。神さまが言えということを言っているだけだ。為せということをさせられているだけだ」

と、キリスト自身が「無者」なんだ。だから、私は

「無者キリスト」

という。世界中に「無者キリスト」と言った人がありますか。

「キリストは神の子だから」

といって、キリストをサムシングにしている。そうではない。

神一切のひとは自分がゼロなんだ。そうすると、凄い力がくる。そういうことをはっき

り言う人がいない。私は自分の体験からはっきり言えるから、皆さんに申し上げているわけです。

自分の信仰なんか問題にしていない。何もありません、「無」です。そうすると、「無限大」になってくる。質的に無限大になる。ありがたくてしょうがない。もぅ、こちらは平伏（ひれふ）しているだけです。

●行為に裏付けられた言葉

この頃の日本のキリスト教界では、私は賀川豊彦さんを最も尊敬してます。あるいは、敬愛しているといってもいい。賀川さんは無ということは言ってはいないけれども、しかし本当に溶け込んでいる人だった。どん底を歩いた人だった。そして本当に、悩める者、病める者、苦しむ人の相手になって、人を救っていった。

私の育った無教会というのは壇上からものを言っているだけだ。何か書きものをして書いているだけだ。そういうのが無教会の伝統だった。何も悪口を言うわけではないけれども、大事なものが欠けている。無教会というのは歴史的に大体、インテリ階級です。インテリの人にものを言っている。インテリではダメなんだ、誰に向かってもあからさまに言えなくては。

私は電車に乗っていると、隣の人と話をして、福音の話にずれていくことが時々ある。

「聖書というのはもったいぶって読むものではなく、こんな楽しいものはないですよ。いっぺん読んでごらんなさい」

と。聖書というのは一番面白くて楽しくて、力が来てしょうがない。「せいしょ」の「せい」の字は神聖の「聖」ではなくて、生命の「生」でもいい。「生書」、生命の書なんだ。

「19**彼等なんじと戦わんとするも汝に勝たざるべし。そはわれ汝とともにありて汝をすくうべければなりとエホバいいたまえり。**」（エレミヤ１・19）

「また、汝を通して人を救うぞ」

と、これがエレミヤに言った神さまの言葉なんだ。このエレミヤ１章19節は大事な言葉です。神さまは、

「自分はお前たちを幼い時から顧みていた」

という。

「1**エホバの言我にのぞみていう。**2**ゆきてエルサレムに住める者の耳につげよ。エホバ斯くいう、我汝につきて汝の若き時の懇切（まこと）、なんじが契（ちぎり）をなせしときの愛、曠野（あらの）なる種播（ま）かぬ地にて我に従いしことを憶（おぼ）ゆと。**」（エレミヤ２・１～２）

出エジプトした時からのことを思い出して、エレミヤに言ってらっしゃるわけです。半奴隷状態から、イスラエルの民をエジプトから呼び起こして、約束の地に連れていったん

だと。

とにかく、この聖書は、旧約から新約に貫いて、神さまの怒りの言葉だとか、慰めの言葉だとか、励ましの言葉だとか、いろいろなものが、その行為と言葉が錯綜して書いてある。行為に裏付けられない言葉は空しい。何かものを言う時には、行為の裏付けがなければダメなんです、実存の裏付けがないと。本当は、実存の裏付けなしにものを言ってはいけない。そんなものは借り物だ。賀川さんは本当に実存をして、そしてものを言っていた人です。

エホバの神さまはエレミヤに非常に親しく呼びかけている、こういうところを読むと、神さまの個人的な顧みというものがよくわかる。あなた方一人一人は神・キリストにみな顧みられている。

「こちら側の祈り」とか、「こちら側の信仰」なんていうものは問題ではない。上から来るところの力、言葉、光、生命、それを問題にしていなければダメなんです。こちら側なんかどうでもいいんだ。

どうぞ、皆さん、

「日に三度省みる」

なんていう言葉があるけれども、冗談じゃない。省みていたら段々ダメになってしまう、こだわってしまうから。こだわるなということです。

●キリストに圧倒されて生きる

なにしろ、今日本は一番精神的に危ない。「オウム」がその危ない代表だ。結局、あれは滅びてしまう。東京の――あるいはどこでもいい、あなた方が住んでいる所、その村、その町の――全体の運命があなた方一人一人にかかっている。

「自分がいるから、この村は、この町は、この都は滅びないんだ」

という、それだけの自信をもたなければダメなんです。一人一人にキリストの力がかかっていれば、圧倒されていればそうなる。「自分の信仰」ではない。そんなことは考えなくていい。

「私は何もありません。ただ上から圧倒されて、その力で生きています」

と。いわゆる「信仰」ではない。

私は無教会にいた時、

「信仰、信仰」

と散々、信仰という言葉を聞かされて嫌気がさしてしまった。

「信仰がなければダメだ。信仰がシッカリしていなければダメだ。行為ではない。信仰だ」

なんて。あなた方は全存在です。全存在がキリストに圧倒されて生きていますか。

「はいっ、私はキリストに圧倒されて生きてます」

と、そういう告白でないと。本願の劫力でないとダメです。こちら側の信仰ではない。私の気合が分かりますね。

とにかく、大学であろうと高等学校であろうと中学であろうと小学校であろうと、教育者そのものが、まず絶対者を相手にしているかということです。西郷南洲の「敬天」が本当にきているか。「敬天」がなければ「愛人」――人を愛すること――はない。西郷南洲はいいことを言った。

「敬天愛人」

とは素晴らしい言葉です。西郷さんは大人物だ。あれだけの人物はあとは出てこないね。

とにかく、第一流のもの、超一流のものを相手にしていくことが大事です。相手にできますよ、キリストの霊でもって聖霊の光で読めば。

「聖霊」というと何か狭いように思うが、そうではない。キリストの霊はもの凄い豊かな内容を持っています。キリストというのは宇宙的だから。本当の宇宙人だ。イエス・キリストは過去・現在・未来、全部を掌握している大変な方です。そうでなければ、聖書の中心になんかなりっこない。旧約・新約の全部の中心はイエス・キリストです。

「キリスト教」ではない。「キリスト」だけでいい。「教」の字はいらない。それが、

「十字架・復活・聖霊」

ときている。これは全部キリストだから。そして、「再臨」。やがて、世の終りにはまたやってくる。だから、祈りの中で、

「主さま！」

と言うと、もうあとは祈りの文句はいらなくなってしまう。「主さま！」と一言、全身でもって祈りの叫びをすると――叫びといってもなにも大きな声を出すことではない――そうすると、あとは言うことが無くなってしまう。全部、その中に入ってしまうから。「主さま！」と言って、自分をキリストの中に投げ入れてしまう、投身してしまう。そうすると、あとは、

「アーメン、ハレルヤ！」

だけだ。簡単なんだ。私は本当に簡単でしょうがないね。

その現実から今度は、何でも展開してくる。本を読もうが、何かを書こうが、何でもそこから展開していく。私は自転車で走っている時でも、自転車をこぎながらキリストを念じている。

●終りなき生涯

終りなき生涯という。終りがあったらお終いですよ、「終り」というのは「これでお終い」ということだから。あなた方はみな「永遠の生命」をいただいているんでしょ。我々は終りがないんだ。この世から次の世に往くので、死ぬということはない。

「小池先生もあんなに元気だったけれども、とうとう死んでしまったか」なんて言っては困る。私は死にはしないんだ、次の世界に往くんだ。

「往生」

という。次の世界に往って生きるんだ。だから、私が向こう側に行ったら、

「万歳！ ハレルヤ！」

と言ってください。湿っぽいのはごめんだ。

イギリスのグラッドストーンもやはり似たようなことを言っていた。グラッドストーンは大したものだ。彼は聖書はもちろんですが、あとホーマーを読んだりした。日本の政治家はそういった一流の文学や聖書を一体読んでいるかね。

「政治家は聖書を読め」

と言いたい。日本は全く精神的に情けない。あなた方は大事な使命を一人一人が担っている。

「この一人がいればエルサレムは滅びない、東京は滅びない」

と、あなた方一人一人はそれだけの存在なんだ。それだけの自信ならざる自信を持ってください。

「私の信仰は…」

なんて、「自分の信仰」なんかを考えないでください。キリストの本願だけでたくさんだ。男でも女でも、

「私はキリストに圧倒されてます。楽しくてしょうがありません、力がきてしょうがありません」

と。だから、疲れを知らない。

「ああ、今日は疲れた」

なんてことはない。集会をして、

「集会の翌日は疲れて、もぬけのからになる」

なんて、冗談じゃない。私は集会をすると、月曜からはまたいよいよ力がきて困る。集会も終りにいくほど大きな声になったり、力が来たりする。あなた方も聞きながら、そうでしょ。聞きながら、

「もう、飽きました」

なんてはダメだよ。飽きたと思ったら、それは聞き方が悪い。

●霊体に復活

キリストの復活のあと50日、これはずっと祈って、聖霊が臨んだ。これが「聖霊降臨節」なんです。御霊が臨むのは、十字架が土台であるということを忘れてはいかん。十字架が土台でない所に聖霊がきたって、その聖霊はあぶない。そんなことをしたら、ヘタすると、悪霊に切り替わってしまう。傲慢の霊になってしまう。十字架で私たちは贖われた。そして、

平伏して祈っていると、聖霊が上から臨んでくる。

「十字架・復活・聖霊」

この三つは離してはダメです。

キリストの復活とはキリストが霊体に、霊的な身体に復活した。

「血気の体あり、霊の体あり」

とパウロが言った、あの「霊体」です。息を吹き返したということではない。霊体としてキリストは現れた。それで、聖霊を私たちにくださった。

「火の如きものが上から臨んだ」

と書いてある。

7日の7倍の49日のその翌日がこの「五旬節」、聖霊降臨なんです。

1五旬節の日となり、彼らみな一処（ひとところ）に集い居（つど）りしに、2烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、

「烈しき風の吹きたるごとき響き」とある。これは聖霊です。烈しい聖霊がやってきた。天から起こって家に満ちた。

3また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人（おのおの）のうえに止まる。

これは本当に凄い。これを描いたグレコの有名な絵があるね。

4彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣（の）べしむるままに異邦の言（ことば）にて語りはじむ。

「異邦の言」とは異言的な言葉です。これは訳がおかしい。異言、霊言なんです。自由に相手の人の国の言葉で語ったりした。これは大変な現象です。

5時に敬虔（けいけん）なるユダヤ人ら天下の国々より来（きた）りてエルサレムに住み居りしが、6この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語（くにことば）にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合い、7かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、8如何にして、我等おのおのの生まれし国の言をきくか、9我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、10フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人――ユダヤ人および改宗者――11クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語（くにことば）にて彼らが神の大いなる御業をかたるを聞かんとは』12みな驚き、惑いて互いに言う『これ何事ぞ』

13或者どもは嘲りて言う『かれらは甘き葡萄酒にて満たされたり』

14ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣（の）べて言う『ユダヤの人々および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ、15今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、16これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。17「神いい給わく、末の世

に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影を見、なんじらの老人は夢を見るべし。18その世に至りて、わが僕・婢女に、わが霊を注がん、彼らは預言すべし。19われ上は天に不思議を、下は地に徴を現さん、即ち血と火と煙の気とあるべし。20主の大いなる顕著しき日のきたる前に、日は闇に月は血に変らん。21すべて主の御名を呼び頼む者は救われん』22イスラエルの人々よ、これらの言を聴け。ナザレのイエスは、汝らの知るごとく、神かれによりて汝らの中に行い給いし能力ある業と不思議と徴とをもて汝らに証し給える人なり。

死人を甦らせたりいろいろなことをしたから、これは大変な方だと。

●キリストの十字架・復活

キリストは十字架に架かって亡くなられたが、甦えらされたと次に書いてある。

23この人は神の定め給いし御旨と、預じめ知り給う所とによりて付されしが、汝ら不法の人の手をもて釘碟にして殺せり。24然れど神は死の苦難を解きて之を甦えらせ給えり。彼は死に繋がれおるべき者ならざりしなり。25ダビデ彼につきて言う「われ常に我が前に主を見たり、我が動かされぬ為に我が右に在せばなり。26この故に我が心は楽しみ、我が舌は喜べり、且わが肉体もまた望みの中に宿らん。27汝わが霊魂を黄泉に棄て置かず、汝の聖者の朽ち果つることを許し給わざればなり。28汝は生命の道を我に示し給えり、御顔の前にて我に歓喜を満たし給わん」29兄弟たちよ、先祖ダビデに就きて、我ははばからず汝らに言うを得べし、彼は死にて葬られ、其の墓は今日に至るまで我らの中にあり。30即ち彼は預言者にして、己の身より出づる者をおのれの座位に坐せしむることを、誓いをもて神の約し給いしを知り、31先見して、キリストの復活に就きて語り、その黄泉に棄て置かれず、その肉体の朽ち果てぬことを言えるなり。32神はこのイエスを甦えらせ給えり、我らは皆その証人なり。33イエスは神の右に挙げられ、約束の聖霊を父より受けて汝らの見聞きする此のものを注ぎ給いしなり。34それダビデは天に昇りしことなし、然れど自ら言う『主わが主に言い給う、35我なんじの敵を汝の足台となすまでは我が右に坐せよ」と。36然ればイスラエルの全家は知るべきなり。汝らが十字架に釘けし此のイエスを、神は立てて主となし、キリストとなし給えり』

37人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちに言う『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』38ペテロ答う『なんじら悔い改めて、おのおの罪の赦しを得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん。39この約束は汝らと汝らの子らと凡ての遠き者、即ち

主なる我らの神の召し給う者とに属くなり』40この他なお多くの言をもて証し、かつ勧めて『この曲れる代より救い出されよ』と言えり。41斯てペテロの言を聴き納れし者はバプテスマを受く。この日、弟子に加わりたる者、おおよそ三千人なり。42彼らは使徒たちの教えを受け、交際をなし、パンを擘き祈祷をなすことを只管つとむ。

43ここに人みな敬畏を生じ、多くの不思議と徴とは使徒たちに由りて行われたり。44信じたる者はみな偕に居りて諸般の物を共にし、45資産と所有とを売り各人の用に従いて分け与え、46日々、心を一つにして弛みなく宮に居り、家にてパンをさき、歓喜と真心とをもて食事をなし、47神を讃美して一般の民に悦ばる。斯て主は救わるる者を日々かれらの中に加え給えり。

使徒行伝2章は大事な章です。

●霊的な力

3章になると今度は、ペテロとヨハネが跛者を歩かせてしまった。

1昼の三時、いのりの時にペテロとヨハネと宮に上りしが、2ここに生まれながらの跛者かかれて来る。宮に入る人より施済を乞うために日々宮の美麗という門に置かるるなり。3ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施済を乞いたれば、4ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。5かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、6ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』。7すなわち右の手を執りて起こししに、足の甲と踝骨とたちどころに強くなりて、8躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讃美しつつ彼らと共に宮に入れり。

生まれつきの跛者が歩みだしてしまった。

「ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め」

と言ったら、その言葉に霊的な力があるものだから、それで歩き出したということです。木喰上人の素晴らしい句がある。

「木喰の袈裟や衣は破れてもまだ本願は破れざりけり」

袈裟や衣は破れたけれども弥陀の本願は破れない。こちら側はどうなろうと、弥陀の本願の力は破れるどころの騒ぎではないという。

「仏法は善きも悪しきもへだてなしわが本願にもらすものなし」

これは仏さまの声です。仏法は相対的な善悪なんてものは隔てがない、どちらでもよいという。「わが本願」は相対的な善しも悪しきも全部、本当はそれを救ってしまう。

「本願にもらすものなし」

とは素晴らしい言葉だ。

「世を棄てて世に棄てられて法身も仏法僧の光なりけり」

やはり、仏道の方でも本当の境地はこれと似たものがあるわけです。

私が非常に嘆かわしく思うのは、

「日本の教育者自身が、小学校から大学にいたるまで、正しい意味における宗教を持たなければダメだ」

ということです。なにも、教場で宗教のことを語るという意味ではない。語る人そのものが、仏道にしろキリスト道にしろ、その中に本当に自分が溶け込んでいる人でなければ、本当の教育はできないということです。

とにかく、神さまがエレミヤに、

「彼らがいくら戦ってもお前には勝てない。私はお前を決して棄てない」

と言われたということ。エレミヤ1・19は、あなた方一人一人がそのように神・キリストから顧みられている。

そして、悪との戦いをして人を救っていく。人を救わなかったら、信仰なんて言ってもしょうがない。一人の人は少なくとも必ず一人の別な人を救っていかなければ。自分にいただいた信仰にただ甘んじていたらダメです。そんな信仰は腐ってしまうよ、人を救わなかったら。

「来たりて見よ」

と、救いたい人があったら、どうぞ集会に連れてきてください。一向に差し支えない。ここに来れば、何か上からのものが与えられて、

「キリスト教と聞いていたけれども、こういうものか」

と喜んで帰ることになる。

なにも聖霊降臨のことを特別に言わなくたって、私の語っていることが正に聖霊降臨の現実からものを言っている。十字架が土台でなかったら聖霊はダメです。キリストの十字架を本当に土台として、そこに聖霊が臨んでくる。

「十字架・復活・聖霊」

は離してはいかん。観念的に離してはいかんと言っているのではない。現実にです。そして、平伏しの姿です。そうすると、み力に圧倒される。すると、その力でもって人を救っていく、助けていく。こういうわけです。